

100年前にカワセミを撮った男・下村兼史  
－ 日本最初の野鳥生態写真家 －

インタビューシリーズ・第2弾  
「野鳥に気づいて、命のドラマを知ろう」  
(前編)

ゲスト：安西英明 氏  
(公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員)



《コガモ》撮影年不詳 千葉県新浜  
撮影：下村兼史 所蔵：(公財) 山階鳥類研究所

## 目次

下村兼史と日本野鳥の会 \_\_\_\_ p.3

あるがままの命のドラマ \_\_\_\_ p.4

命育つ夏 \_\_\_\_ p.5

若い鳥を探してみよう \_\_\_\_ p.8

### 本プログラムについて

フジフィルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019年度には1万4千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されておられない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。

## 下村兼史と日本野鳥の会

—— コロナ禍で開催が中止となった野鳥観察会に代えて、日本野鳥の会・主席研究員の安西英明さんに下村兼史と日本野鳥の会のこと、そしてこの時期の野鳥観察について教えていただこうと思います。現在、下村兼史の写真や資料類は山階鳥類研究所に収蔵されていますが、下村は日本野鳥の会とのつながりもあるそうですね。

**安西** はい。日本野鳥の会は、1934(昭和9)年に中西悟堂によって創設されました。同年に創刊された会誌『野鳥』で最初に掲載された写真は、下村が撮影した白鳥の写真なんですよ。

—— そうなんですか。

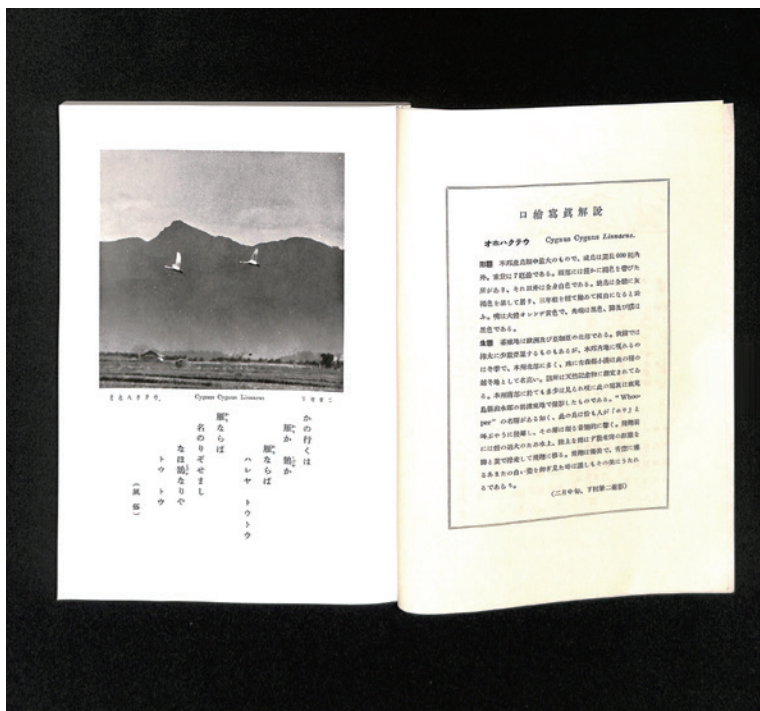
**安西** 下村は、創刊号以降も写真の提供や寄稿を続けています。皇居のお濠で休むヒシクイなど、記録として貴重な写真もあるんですよ。

—— ヒシクイはガンの仲間で、今は天然記念物だそうですね。東京にもガンがいたということがわかる、本当に貴重な記録ですね。どれも下村らしい美しい構図の写真です。

**安西** 1939年に、中西は日本野鳥の会の中に研究部を発足させます。下村は山階鳥類研究所の生みの親、山階芳麿らとともにその指導役にもなりました。鳥の研究は役人や華族のような方々が中心だった時代のことなので、この研究部は、一般の方というか、普通の人々が鳥の研究に関わるきっかけになったと考えられます。



『野鳥』誌創刊号(1934年)表紙  
(写真は復刻版 所蔵：日本野鳥の会)



「オオハクチョウ」(撮影：下村兼史)掲載ページ  
(『野鳥』誌創刊号、1934年/写真は復刻版 所蔵：日本野鳥の会)



お濠に眠るヒシクイの群

下村兼史

「お濠に眠るヒシクイの群」(撮影：下村兼史) 掲載ページ  
(『野鳥』誌 第1巻 第6号、1934年/写真は復刻版 所蔵：日本野鳥の会)

——歴史的に重要な役割を果たしたのですね。

**安西** 中西は「野の鳥は野に」と、自然の中にあるがままの鳥を愛で、保護することを提唱していました。これは東洋思想を原点とするもので、西洋的な思想とは異なる観点から、今日的な環境問題の根源を問うていたとも言えると思います。下村兼史も、自然のあるがままを愛したという点で共通していますね。下村は1920年代から野鳥を撮影していますから、野鳥の写真に関しては先輩とも言えます。

—— そうだったのですね。

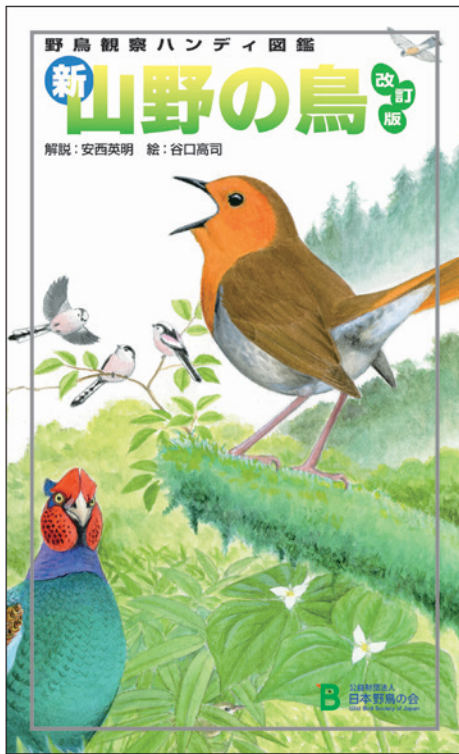
## あるがままの命のドラマ

**安西** あるがままの野鳥に親しむことは、資源やエネルギーを浪費せずとも可能ですし、あるがままの自然を知ることで、どうしたら「あるがまま」を損なわないかを考えることにも繋がります。

—— 「あるがまま」ですか。

**安西** 「あるがままの自然、あるがままの野鳥に親しむ」ということは、私にとっては、まだわかっていないことがたくさんあるという事実を認識し、文明の有難さや危うさを感じるきっかけにもなりました。

—— 今回の新型コロナウイルス感染症の拡大によって、こういったことを再認識させられた方も少なくないかも知れませんね。



安西英明氏（撮影：小川直子）

安西氏が解説を担当する図鑑『新・山野の鳥』  
（解説：安西英明 絵：谷口高司 発行：日本野鳥の会）

**安西** 野鳥に気づき、野鳥が暮らすあるがままの自然を知ろうとすれば、この惑星の景色はすべてが命の住処であり、どんな命にも生から死に至るドラマがある、ということに気づくことができるでしょう。

—— 野鳥に気づくことで、身近なところでも、命のドラマが見えてくるのですね。

**安西** 私が解説を担当する図鑑では、身近にいる野鳥として23種をあげていますが、フジフィルム スクエアのある六本木の東京ミッドタウンでも、20種以上の野鳥が観察されているんですよ。

—— 都会でも、こんなに多くの種類の野鳥がいるのですね。気づきませんでした。

**安西** 皆様のお住まいの近くでも、たくましく暮らしている鳥たちがいるはずで、鳥が食べる虫、虫が食べる植物など、命のつながりがドラマとして展開されているに違いありません。これからの季節に合わせ、夏の「命のドラマ」の一部をご紹介します。

## 命育つ夏

—— 命のドラマはどんなふうに見つけることができますか？

**安西** あるがままの命は生きのびるほうが少ないという事実を知れば、ドラマが見えてきますよ。

—— 生きのびるほうが少ない。考えてみれば自然界では当たり前のことですが、改めて聞くとハッとさせ

られます。

**安西** あるがままの自然には季節があり、命目覚める春、命育つ夏、命つなぐ秋、命耐える冬と巡っています。冬を生きのびた鳥たちは恋の季節を迎え、春にペアになると、子育てを始めます。たくさんの虫を餌にできる夏までに子育てを終え、子供の自立とともにペアの関係もなくなるのが普通です。

—— 親子や夫婦の関係は繁殖期だけのものなんですね。

**安西** 秋冬は、群れになったとしても1羽ずつに特別な関係や絆はなく、それぞれが食物を求め、悪天候を耐えしのぎ、天敵から逃げのびなくてはならないんです。

—— ひと冬を越すのは大変なことなんですね。

**安西** 野生の命は、他の命の食物になるほうが多いのです。だからこそ、人類生存の基盤とも言える生物多様性や持続可能性があるわけですね。生存率が低い野生生物は、関係性を長期間、保つことはできないのです。

—— 確かにそうですね。

**安西** 小鳥に食べられる側の虫の世界では、生存率1パーセント以下も普通のように、ペアや親子という関係性もありません。

—— だからたくさん卵を産んでも増えすぎることがないのですね。



枯草をくわえたツバメの幼鳥

「成鳥より尾が短いので、幼鳥とわかる。食べられない枯草をつまんでいるのは好奇心からだろうか」

**安西** 多くの虫が小鳥の餌となっているはずなので、私たちが目にする虫は、鳥の捕食から逃れたほんの一部といえるかもしれないですね。例えばガの仲間などは鳥に目立たないような地味な姿で夜行性を基本とし、チョウの仲間は昼に目立つことで鳥にとっておいしくないことを知らせるのがサバイバル戦略と考えられています。

—— そうということなんですね。

**安西** 鳥は虫よりは生存率が高いはずですが、春に生まれた子が夏までに自立して冬を越し、翌年春に繁殖できるようになるのは1割ほどではないでしょうか？

—— 1年で大人になれるにしても、9割は大人になれないということになりますね。

**安西** だからこそ、毎年、短期間で子沢山の子育てを繰り返しても、それで増えすぎることはないのです。

—— そうですね。

**安西** 小鳥では、ひなが巣立つまで2～3週間です。スズメでは、親鳥がひなを2週間で巣立たせるまで4200回、虫を運んだという観察例もあります。

—— 2週間で4200回としたら、1日平均で300回にもなります！



こけたスズメの幼鳥

「幼鳥は成鳥より顔の黒斑が淡く、翼の白い線が目立たない。  
左の幼鳥は足を滑らせて落ちそうになり、翼を広げた」

**安西** 巣立ち後の子供が自立するまでの期間は、10日から1か月ほどの種が多いですね。夏までに2回、3回と繁殖を繰り返すペアもいます。繁殖成功率は低いので、一度も成功しないもの、8月になってやっとひなが巣立ちに至るものもいます。

—— 夏はすでに自立した子もいる一方で、まだ親子が見られる可能性もあるということですね。

**安西** ひなは巣立つ頃には羽が生えそろい、親鳥に近いサイズになっているので気づかれないでいることが多いです。ただし、親子がわかりやすいカモやキジの仲間は例外で、ひなが小さいうちに巣を離れるためです。

—— そうなんですか。多くの鳥では大きさでは親子がわからないとは知りませんでした。

## 若い鳥を探してみよう

**安西** 巣立ち後の子供（幼鳥）は、しばらくは、色が薄い、声が違う、親鳥を追って餌をねだるなどから、成鳥でないとわかります。

—— 夏はすでに自立した若い鳥も多いんですよね。自立したら親鳥を追わなくなって、若い鳥はより見分けにくくなりませんか？

**安西** 若い鳥は飛行や着地が下手だったり、採食や生理的な行動（後半で解説する水浴びや羽繕いなど）もぎこちなかったりします。食べられないものを食べようとするなど、経験を積んだ成鳥ならするはずがない



ビニールひもをくわえるスズメの幼鳥  
「目立つものが気になるようで、青いひもをくわえようとしている」





アンテナをつつくハシボソガラスの幼鳥  
「カラス類の幼鳥は口の中が赤い。アンテナのつなぎの部分が気になるようだが、成長するにつれこのような無駄な行動はしなくなるはず」

無意味な行動も見られます。

—— 夏は自立できたとしても、まだ学習途上にいるものが多いわけですね。

**安西** 若い段階の好奇心やチャレンジで学び、経験を積んだものが生き残ると考えられるので、変なこと、意味がないようなことを続けているとしたら、それは生き残れそうにないと思われま

—— かわいそうですね。

**安西** そうですね、切なくもなります。でも、だからこそ、出会った鳥が若いとわかれば、応援してあげたくありませんか？

—— そうですね、無事に成鳥になってほしいと応援したくなります！

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

\* インタビューは後編に続きます。8月13日（木）に掲載予定です。

●ゲストプロフィール

安西英明（あんざい・ひであき）

1956年、東京生まれ。1981年、日本で初めてのサンクチュアリ「ウトナイ湖サンクチュアリ」にチーフレンジャーとして赴任する。現在は日本野鳥の会・主席研究員として、野鳥や自然観察、環境教育などをテーマに講演、ツアー講師などで全国や世界各地を巡る。解説を担当した野鳥図鑑は45万部以上発行。テレビやラジオなどでも活躍中。

現在、公益財団法人 日本野鳥の会・理事および主席研究員。公益社団法人 日本環境教育フォーラム・理事。苫小牧観光大使。公益財団法人 日野自動車グリーンファンド・評議員。

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展  
関連プログラム

100年前にカワセミを撮った男・下村兼史 - 日本最初の野鳥生態写真家 -

インタビューシリーズ・第2弾

「野鳥に気づいて、命のドラマを知ろう」（前編）

ゲスト：安西英明氏（公益財団法人 日本野鳥の会・主席研究員）

展覧会

会場：フジフィルム スクエア 写真歴史博物館

会期：2020年7月1日（水） - 9月30日（水）

主催：富士フィルム株式会社

特別協力：公益財団法人 山階鳥類研究所

協力：公益財団法人 日本野鳥の会、有限会社バード・フォト・アーカイブス

監修：公益財団法人 山階鳥類研究所

後援：港区教育委員会

企画：フォトクラシック

記事

公開日：2020年7月30日

発行：富士フィルム株式会社 宣伝部

写真提供：金子精一・光江（pp.6-9）

編集：フォトクラシック

デザイン：脇野直人

© 富士フィルム株式会社 禁無断転載